

「断り」表現の日中対照研究

著者	李 海燕
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	152
URL	http://hdl.handle.net/10097/56699

L I HAI- YAN
李 海 燕

学位の種類 博士(国際文化)
学位記番号 国博 第152号
学位授与年月日 平成25年 9月25日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻 東北大学大学院国際文化研究科(博士課程後期3年の課程)
国際文化交流論専攻
学位論文題目 「断り」表現の日中対照研究
論文審査委員 (主査)
准教授 中本武志 教授 小野尚之
准教授 ナロック ハイコ
教授 佐藤勢紀子

論文内容の要旨

異文化間の交流を行う際に、文化や習慣の違いを乗り越えて円滑な意思の疎通を行うことは非常に難しい。文化的な相違に基づく誤解を防ぐためにはさまざまな知識が必要とされるが、適切な「断り方」の習得もその一つである。

本研究は、異文化間コミュニケーションで生じる問題の解決を目指し、ポライトネス理論に基づき、語用論的視点から、日本と中国における「断り」表現について比較対照する。具体的には、日本語母語話者、中国人日本語学習者、中国人非日本語学習者それぞれにどのような「断り」表現が現れるか、その「断り」表現は適切であるか、どのような配慮表現が使われるかに焦点を当て、共通点と相違点を明らかにすることを目的とする。

以下では、各章の概要と分析結果について述べる。

第1章では、適切な「断り」が円滑なコミュニケーションに必須であることを述べ、中国における日本語教育の現状及び、「断り」表現の指導に関する指導要領の問題点を指摘したうえで、本研究の狙いと目的についてまとめた。

中国の日本語教育において、コミュニケーション能力の育成が目標とされ、日本文化の理解と状況に合った「言語運用能力」の向上が重要視されている。

ところが、未だ一部の指導内容は実際の場面に適応していないと思われる箇所があった。例えば「断り」という項目で、「失礼ですが、お断りいたします。」「残念ですが、ご希望には添いかねますが…」、「…お引き受けしかねます。」などの指導内容がある。このような「断り」表現は、実際の断り場面にも使われてはいるものの、円滑なコミュニケーションのためにはこれだけで十分とは言いがたい。

第2章では、本研究の理論背景、分析方法及び先行研究について述べた。

本研究では、Brown & Levinson (1987) のフェイスに基づくポライトネス理論を背景とし、「意味公式」(Beebe et al. 1990、生駒・志村 1993) という単位で分析を行う。

Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論は Goffman (1967) のフェイスの概念を発展させ、ポジティブ・フェイス (PF) とネガティブ・フェイス (NF) の二つの「欲求」として再定義したものである。Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論は、PF と NF という 2 つのフェイス (欲求) を維持するために、5 つの「ポライトネス・ストラテジー」を使用する。それにより、円滑なコミュニケーションの実現はもちろんのこと、良好な人間関係を保持することができる。

Brown & Levinson (1987) は英語だけでなく、ツェルタル語、タミル語、マダガスカル語、日本語のような多様な言語を分析対象としていることから、この理論は異なる言語表現の対照比較することができる枠組みであると考えられる。

本研究は、異文化間の円滑なコミュニケーションにおいて、良好な人間関係を保つために、日本語と中国語の「断り」表現のポライトネス・ストラテジーを比較し、個々の断り表現がだれのどのフェイス (欲求) を満たすストラテジーであるかを分析することにより、普遍的な理論との関連性を持たせることを目的とする。したがって、本研究では Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論を理論的背景として採用することにした。

しかし具体的な断り表現をポライトネス・ストラテジーに分類するには、そのための基準がなくてはならない。一つ一つの表現に見られる違いを捨象し、いったん機能別に整理した後で、その機能に基づいてストラテジーに対応させる必要がある。本研究ではそのために Beebe et al. (1990) の「意味公式」を用いることにした。ただし、先行研究に使われている従来の「意味公式」には、分類と範囲において問題点と補充すべき点があると思われる。

(I) 意味公式の分類

伊藤 (2003) は意味公式「代案提示」を「相手との関係を維持したい旨の積極的な働きかけ」、「条件提示」を「断りの保留」と定義している。

しかしながら、収集したデータには、次のように定義に当てはまらない例も現れている。

- (1) a. 他の人にかりて。
b. 他にあたってくれ。
c. 他の人に頼んでみてくれていい?
- (2) a. 早く終わったら受け付を手伝います。

b. 終わり次第、手伝いにきます。

(1)は代案提示ではあるが、「積極的な働きかけ」というよりは自分が引き受けることを回避するための行動というべきであろう。したがって「代案提示」には、相手との関係維持のために「自分から働きかける」積極的な提示と、「自分は回避する」消極的な提示に分ける必要がある。つまり、積極的な「代案提示」は相手の利益なるように、という行為であるので、聞き手のポジティブ・フェイスに配慮していると言える。一方、消極的な「代案提示」は話し手が回避するための行為であり、B&Lのフェイス理論を応用すれば、話し手のネガティブ・フェイスを守ろうとしていると言える。

また、(2)の内容から「条件提示」には、「ある条件さえ満たせば自分ができる可能性が高い」という積極的な提示を付け加えることができよう。これは、自分ができる限りのことを協力することで、聞き手のポジティブ・フェイスに配慮する行為である。

ほかにも、伊藤(2003)の「意味公式の分類」の定義に当てはまらない例が少なからず現れている。

(II) 意味公式の範囲

Beebe et al. (1990)、生駒・志村(1993)、伊藤(2003)では「謝罪」が意味公式の一つとして立てられているが、「謝罪」は何度か繰り返されることがある。本研究で出現した例を示す。

(3) すみません、土曜日は就活で会社の説明会に行くのでできません。申し訳ありません。

「1回目の謝罪」

「2回目の謝罪」

例(3)のように、「謝罪」が2回出現することは、ただ謝罪をするというだけではなく、相手との人間関係を維持したいがための気配りで、関係維持の強調であると考えられる。本研究では、意味公式の出現頻度を算出する際、これらを2回と数えることにした。

本研究では先行研究の成果を参考にし、先行研究の「意味公式」の分類の問題点を踏まえて、「断り」表現の分類に使用する「意味公式」を内容面で充実させ、機能を明確にした。

さらにB&Lのフェイス理論を拡張適用して、各意味公式は話し手と聞き手のいずれかまたは両方のフェイスを守るための方略であると仮定し、各意味公式を誰のどのフェイスに対する配慮なのかを基準に特徴付けを行い、すべてのストラテジーを聞き手のポジティブ・フェイスに対する配慮(H-PF)、聞き手のネガティブ・フェイスに対する配慮(H-NF)、話し手のポジティブ・フェイスの維持(S-PH)、話し手のネガティブ・フェイスの維持(S-NF)に分類した。これにより、意味公式を普遍的なポライトネス理論に関係づけることができただけでなく、「圧倒的な理由の説明」を謝罪に含めるなどB&Lに見られたいくつかの不備を修正することができた。

第3章では、調査対象者である日本語母語話者、中国語母語話者、中国国内にいる日本語学習者、中国人留学生の年齢および人数について紹介し、アンケート調査の内容と実施時期、アンケート調査の目的、データの収集方法について述べた。

以下の表1は、DCT調査の対象者の年齢及び人数であり、表2はアンケート調査の人間関係の内訳と内容である。

回答者	年齢	実施大学	全体（人）
JJ	20代前半	日本・山形大学	110
CC	20代前半	中国・北華大学	112
CCJ	20代前半	中国・北華大学、長春理工大学	82
CJ	20代前半～後半	東北大学、山形大学	84

表 1 対象者の年齢、内訳及び人数

場面	上下関係	親疎関係	相手	内容
依頼	目上	親／疎	先生	研究会の受け付けを手伝ってほしい
	同輩	親／疎	友達	お金を貸してほしい
勧誘	目上	親／疎	先生	講演会後に飲み会をする
	同輩	親／疎	友達	カラオケに行く

表 2 アンケート調査の人間関係の内訳と内容

B&Lによれば、フェイスが侵害される度合いは「上下関係」、「親疎関係」、「負担度」という3つの要素によって決まる。したがって、表2のような変数を設定して、意味公式の出現順序や出現頻度から、日本語母語話者・中国語母語話者非日本語学習者・日本語学習者のポライトネス・ストラテジーの使用の特徴を明らかにすることが可能である。

場面は、日本社会でも中国社会でも日常生活で遭遇しやすいものとするため、依頼については「先生に研究会の受け付けの手伝いを頼まれる」および「友達同士のお金の貸し借りをする」という場面を、勧誘については、「飲み会やカラオケに誘う」という場面を、それぞれ設定した。

設定内容の目上からの「受け付けの手伝い」の依頼と同輩からの「金銭の貸し借り」の依頼、目上からの「飲み会」への誘いと同輩からの「カラオケ」への勧誘は、負担度が等しいとは言えないが、ある程度負担度があり、且つ、自然な依頼として、上の四つの状況を設定した。

データの収集には筆記と口頭による談話完成テスト（DCT）を用い、一部の被験者にはフォローアップ・インタビューを行った。

第4章「DCT調査の結果と考察」では、親疎関係と上下関係を変数として、依頼と勧誘の場面別に、最初に用いられた意味公式（ストラテジー）を比較分析した。最初に用いられた意味公式の種類と頻度を調べたのは、最初に用いられる公式がもっとも優先されるストラテジーだと考えたからである。

依頼場面において、日本語母語話者と日本語学習者は親疎関係・上下関係に関わらず、まず詫びており、相手のポジティブ・フェイスに配慮していた。日本語学習者は日本語母語話者と比べ「詫び」先行型の割合が少なく、「詫び」表現の種類が異なっているとはいえ、日本語学習者が比較的うまくいつていることが分かった。

中国語母語話者は、目上に対しては親疎関係によってストラテジーを変えていた。目上には、はじ

めに詫びるが、同輩にはまず理由を説明している。

勧誘場面において、日本人大学生と中国人大学生は、目上には親疎関係によって意味公式を変えていたが、同輩に対しては中国人留学生のみ親疎関係による変化はなかった。

日本語母語話者は依頼場面においても、勧誘場面においても、親疎関係・上下関係を問わず、まず詫びることが多く、謝罪を優先することが一般的で、日本語社会の語用論的ルールであることを改めて確認することができた。つまり、いくら親しい相手であってもまず詫びることで、丁寧さを欠かさないのである。

一方、中国語母語話者は場面（依頼と勧誘）・親疎関係・上下関係により異なっており、目上からの依頼場面のみ、H-PF「詫び」先行型が多い。ほかでは、まず共感を示すか、理由を説明することを優先させている。つまり、親しい相手には遠慮するよりは、相手と一層良い人間関係を築き、聞き手との「心的距離」を縮めようとする話し手の気持ちが反映されているとも言える。また同じ理由説明でもよんどころない事情であることを強調し、話し手と聞き手双方のフェイスに配慮した S/H-PF「理由説明」の多さが目を引く。

日本語学習者は依頼場面では、日本語母語話者と同じく親疎・上下関係ともまず詫びる点で共通しており、相手のフェイスに配慮しているように見えるが、日本語母語話者よりは謝罪する人の数が少なかった。日本語学習者は H-PF「共感」先行型において母語からの語用論的転移が見られたが、その中でも中国国内にいる日本語学習者は親しい目上に過剰に共感を示している問題点が浮上した。

勧誘場面でも、中国国内にいる日本語学習者も中国人留学生も、特に親しくない同輩の場合に、相手との関係を重要視し、共感を示しているが、ここでも過剰使用が問題になる。

第 5 章では、用いられた意味公式すべての頻度を考察し、親疎関係と上下関係との相関を探った。その結果は以下のようにまとめられる。

依頼を断る場面では、目上に対しても同輩に対しても、日本語母語話者、中国語母語話者、日本語学習者は親疎関係によって意味公式を変えていた。

日本語学習者は親疎とも日本語母語話者と同じく H-PF「詫び」ストラテジーが多く、二度目の「詫び」も見られるが、その頻度は日本語母語話者に比べると低い。また、学習者は母語話者と比べ BOR「結論」で断ることが少なく、特に中国国内にいる学習者は母語話者よりも過剰に気配りをしていることが分かった。

総じて見ると、日本語母語話者と中国にいる日本語学習者は上下関係・親疎関係を問わず、相手のポジティブ・フェイスに配慮するが、中国人留学生は目上には日本語母語話者と同じくポジティブ・フェイスに配慮し、同輩には中国語母語話者と同じく両方のポジティブ・フェイスに配慮していることが分かった。

日本語学習者は、依頼の場面では、日本語母語話者と同じく親疎・上下関係とも相手のポジティブ・フェイスに配慮し謝罪をする点で共通しているが、二度目の「詫び」をする学習者は日本語母語話者より少ない。

勧誘を断る場面では、目上に対しても同輩に対しても日本語母語話者、中国語母語話者、日本語学

習者は親疎関係によって意味公式を変えていた。

日本語母語話者と中国国内にいる学習者は、親しい目上に S/H-PF「理由説明」が多く双方のポジティブ・フェイスに配慮するが、親しくない目上と同輩には H-PF「詫び」が多く相手のポジティブ・フェイスに配慮していた。一方、中国人留学生は、目上には親疎とも双方のポジティブ・フェイスに配慮するが、同輩には親疎によって配慮するフェイスが異なっている。親しい同輩にはポジティブ・フェイスに配慮するが、親しくない同輩には自分のネガティブ・フェイスを守ろうとしていた。

日本語学習者は、依頼場面では、母語話者と同じく親疎・上下関係とも相手のポジティブ・フェイスに配慮し謝罪をする点で共通しているが、二度目の「詫び」をする学習者は母語話者より少ない。

勧誘場面で、外国語環境にいる日本語学習者と目標環境にいる日本語学習者は配慮するフェイスが異なっていた。

中国国内にいる学習者は母語者と同じく、親しい目上にも S/H-PF「理由説明」が多い以外は、H-PF「詫び」が多く、相手のポジティブ・フェイスに配慮していた。中国人留学生は、目上には親疎とも双方のポジティブ・フェイスに配慮するが、同輩には親疎によって配慮するフェイスが異なっている。親しい同輩にはポジティブ・フェイスに配慮するが、親しくない同輩には自分のネガティブ・フェイスを守ろうとしていた。

目標言語環境にいるにも関わらず、中国人留学生は日本語社会の語用論的ルールに従っていないことが分かった。このような部分から「主張が強い」「自己中心的である」「配慮が見られない」といった誤解が生じ、異文化間コミュニケーションを行うにあたって摩擦が起きてしまう可能性が高い。

相手との親疎関係、上下関係、「心的距離」を考慮に入れ、日本語社会の語用論的ルールに基づいた相応しい言語行動を行うべきであることが如何に重要であるかを、外国語環境にいる学習者ばかりではなく、目標言語環境にいる日本語学習者にも認識させる必要があると思われる。

第6章では、録音データから、はじめにどの意味公式が用いられ、どのストラテジーが優先されているのかを考察するとともに、用いられた意味公式すべての頻度から、最も多用されているストラテジーについて考察し、さらにそれぞれを DCT 調査と比較した。

目上からの依頼を断る際には、DCT 調査でも録音調査でも、日本語母語話者と日本語学習者はまず謝罪をすることにおいては共通しており、学習者が「詫び」を優先させることと、母語話者も学習者も「すみません」表現を主に用いることが確認された。

二度目の「詫び」の使用については、日本語母語話者は口頭データのほうが筆記データより増えており、しかもその差が大きい。つまり JJ は口頭では、二度にわたってしっかりと詫び、親しい相手ほど気を使っていることが窺われる。ところが日本語学習者は、口頭データと筆記データとの差があまりなく、日本語母語話者と対照的である。実際の話し場面のなかで「詫び」表現への指導も「断り」表現の学習項目の一つとして取り上げるべきではないかと思われる。

目上からの勧誘に対する断りでは、録音調査でも DCT 調査でも日本語母語話者、日本語学習者は「すみません」による詫びが主であることが確認された。録音調査と DCT 調査との間にはそれほど差がなかった。ただ、5章の DCT 調査でも述べたように、自分のネガティブ・フェイスを守る日本語

母語話者とは逆に、相手のポジティブ・フェイスに配慮した内容が多い日本語学習者には、控えめな「次回への約束」の内容に関する理解と知識が求められる。

同輩からの依頼・勧誘を断る場合の主な謝罪表現は、日本語母語話者は親疎とも「ごめん」が、中国国内にいる日本語学習者は「すみません」、中国人留学生は親しい同輩には「ごめん」、親しくない同輩には「すみません」であり、「詫び」表現の選択は DCT 調査とまったく同じ結果であった。

日本語学習者は、親しくない同輩に対しての「詫び」表現として「すみません」が多く、かなり相手のフェイスに配慮した謝罪が行われている。しかも、中国国内にいる日本語学習者は「です・ます」調の丁寧体が多い。

口頭データから、中国人留学生は、終助詞への理解と学習ができていることが確認されたが、中国国内にいる日本語学習者は終助詞の使用は少なかった。

外国語環境におかれている日本語学習者に見られたこれらの問題点と学習すべき点は、実際の話し場面のなかで教えていく必要があることを示唆している。

全体的にみると、DCT 調査と録音調査で共通している点として、日本語学習者も日本語母語話者も二度目の「詫び」使用が多かったが、特に母語話者の使用が目立った。

DCT 調査において、回答者は場面や相手や内容についてある程度、考える時間があり目上か同輩かという相手のイメージを思い浮かびながら回答したと思われる。一方、録音調査において、回答者は上で述べた場面・相手・内容に関する理解がそれほど深くなかったともいえるだろう。回答にあたって、理解する時間の有無、長さも DCT 調査と録音調査の結果に相違点があった原因の一つであると思われる。

DCT 調査と録音調査を行うことによって、明らかになったこととして、日本語学習者は中国国内にいても日本にいても、日本語母語話者と同じく相手のポジティブ・フェイスに配慮する H・PF「詫び」先行型が多く用いられることから、中国国内の日本語教育において、「詫び」表現についての指導はしっかり行われていること、日本語学習者は日本語母語話者と比べ結論まで言って断ることが少ないが、とりわけ中国国内にいる日本語学習者の割合が低く、日本語母語話者よりも過剰に気配りをしていることが分かった。

日本語学習者は二度目の「詫び」使用があるとはいえ、日本語母語話者の使用回数より低い。中国国内にいる日本語学習者のなかには、謝罪しない人もおり、「詫び」に関する認識と理解を深めていく必要がある。さらには、二度目の「詫び」の使用に注目し、「断り」表現の指導内容に取り入れるのも、円滑なコミュニケーションができる方法の一つであるのは間違いないだろう。

第 7 章では、DCT に現れたデータの、意味公式以外の側面を分析した。具体的には、日本語学習者の接続助詞の使い方、配慮表現としての副詞やモダリティ表現の選択とその使用、「中途終了文」の選択について、母語話者の発話と比較し、日本語学習者の留意すべき点を取り上げた。

まず、「から」「ので」の使い方について検討した。

「から」と「ので」を中心に日本語母語話者と日本語学習者を比較した結果、目上に対する「から」か「ので」かの選択において、目標言語環境にいる日本語学習者と外国語環境にいる日本語学習者に

は差が見られた。中国の日本語学習者は目上にも「から」を「ので」より多く使用し、丁寧さに欠ける印象を与えていた。一方、中国人留学生は目上に対して「から」より「ので」が多く、目上の相手に対して丁寧に接しなければならないという意識があること、「から」と「ので」の使い方を習得していることが明らかとなった。

さらに、中国国内にいる日本語学習者は「アルバイトがあります」「私は疲れています」「用事があります」という「命題直接提示型」が多く使われていることが特徴的であり、今後の日本語教育的課題を示している。

日本語学習者には「から」と「ので」の選び方、命題直接提示型に関する日本語教育の指導が必要不可欠である。

次に、配慮表現としての副詞について検討した。

日本語母語話者と日本語学習者は、「理由説明」に「どうしても」「あいにく」を、「共感」には「せっかく」「ぜひ」を、「結論」には「ちょっと」「そうにない」「…かもしれません」を使っている。相手からの依頼や勧誘を断るという行為を緩和し、「面子の保持と人間関係の維持」のために、これらの副詞を付け加えるなどの配慮表現が多かった。

日本語母語話者は配慮表現としての副詞をよく用いているのに比べ、日本語学習者、中でも中国国内の日本語学習者は「ちょっと」のみが多い。「ちょっと」の使用において、日本語学習者が日本語母語話者よりも多いのは、教科書から学んだ知識で多用しているためと考えられる。中国国内にいる日本語学習者も中国人留学生もその使用数が日本語母語話者の使用数の2倍を超えており、日本語学習者は「ちょっと」を過剰使用していることが分かった。

ほかに、データに現れた緩和表現として「…そうにない」、「…かもしれない」という文末表現を母語話者と中国人留学生は用いているが、中国国内の日本語学習者にはまったく現れていない。

続いて、「中途終了文」について比較した。日本語学習者は、「ちょっと…」と「～はちょっと…」を多用していて、特に、中国国内の日本語学習者には「～ちょっと…」という「中途終了文」の使用が多いのが特徴的である。これは、日本人は断る場面において「ちょっと…」という「中途終了文」をよく使っているという教科書からの学習が原因であると考えられる。

「～はちょっと…」ははっきりと直接的な断りを避けるための配慮表現である。「土曜日はちょっと…」、「その日はちょっと…」、「それ（受け付け）はちょっと…」等々あるが、「土曜日」や「その日」は都合が悪いが、別な日であれば大丈夫であって、依頼や勧誘の内容による断りではないと解釈することができる。ところが、「それ（受け付け）はちょっと…」は、時間や能力上の原因ではなく、依頼や勧誘の内容についての断りであるから、特に目上に対しては失礼な言い方になりかねない。

「ちょっと…」の「中途終了文」において、先行研究の生駒・志村（1993、p.47）の指摘とは異なる結果が得られたことは、実際の運用場面のなかで、「ちょっと…」に関する指導を見直すべきであることを示しているかもしれない。

日本語学習者のなかでも、中国国内にいる日本語学習者には「中途終了文」についての使用において、「～（は）ちょっと…」の多用、「接続助詞」の機能に関する知識（中途終了文を含む）の不足な

ど、いくつかの問題点が見られた。外国語環境におかれている日本語学習者には、「察し」という日本語母語話者の語用論的能力の観点から説明を行い、「中途終了文」の種類と機能を教える必要がある。

各言語形式の「語用論的能力」に関する知識が欠けると、敬語を使い、適切な語彙で理由を述べて謝罪しても、丁寧には感じられない。日本語レベルからの問題もあれば、誤用であることに気づかないまま繰り返し使用した化石化の可能性がある。

日本語学習者の問題点は、日本語教育にいくつかの新たな課題を示唆している。日本語の社会文化規範に合った正しい言語表現を学習させるためには、談話上よく使用される接続助詞の機能的な意味や、「中途終了文」をもっと実際の運用場面のなかで教えていく必要があるだろう。

第8章は、本研究のまとめである。

本研究は従来の研究と比べ、以下の特長を持つ。

- (1) DCT 調査の被験者の数が多く、統計上の信頼性が高いこと。
- (2) 録音調査も行い、フォローアップ・インタビューを充実させたこと。
- (3) 中間言語の使用者を中国国内にいる日本語学習者と日本に留学している中国人大学生に分け、言語習得の環境も考慮に入れたこと。
- (4) 単なる意味公式の分類にとどまらず、普遍的なポライトネス理論やフェイス理論とのかかわりを重視し、さらに意味公式のリストに意味改良を加えたこと。

本研究は、日本語母語話者と日本語学習者の「意味公式」の内容について比較対照し、その相違点をいくつかを取り上げた。これらの相違点を日本語教育における「言語運用能力」の指導に取り入れることで、中国における日本語教育に貢献できれば幸いである。

また、本研究では、断りの場面においてポライトネスを各場面における意味公式の出現順序・出現回数・内容によって比較対照し、統計的な分析を行ったが、今後は、ポライトネスを表す意識調査も付け加えた定性的な分析を行い、韓国人も対象者に入れ、東アジアの「断り」表現について対照比較したい。

この論文は依頼と勧誘に対する「断り」の言語行為に焦点を絞ったが、異文化接触において摩擦が生じる場面は無数に存在する。本研究の結果と手法によって、その他のさまざまな異文化間コミュニケーションの問題が明らかとなり、その解決の糸口が見つかるならば、それに勝る喜びはない。

論文審査の結果の要旨

異文化間の交流において、暗黙のうちに身につける文化や習慣の違いは、意識に上らせることが少ないだけに、これを乗り越えて円滑な意思の疎通を行うことは非常に難しい。そのような文化的な相違に基づく誤解を防ぐためには様々な知識が必要とされるが、適切な断り方の習得もその一つである。

断り表現の如何によっては相手との間に深刻な摩擦を生む危険があるため、良好な人間関係を形成するためには断り表現について理解し、断り表現の選択の仕方や方法について学ぶ必要がある。

この論文では以上の問題意識を背景として、ポライトネス理論に基づき、日本語母語話者・中国人日本語学習者・中国人非日本語学習者を対象とした断り表現を分析した。それぞれにどのような断り表現が現れるか、その断り表現は適切であるか、どのような配慮表現が使われるのか、母語からの語用論的転移があるかどうか、学習者がどの場面でどのような誤りを犯すのかに焦点を当てることで、日本語母語話者、日本語学習者、非日本語学習者の共通点と相違点を探ることを目的とするとともに、今後の日本語教育に役立つ考察を目指している。

本研究は従来の研究と比べ、以下の特長を持つ。(1) DCT 調査の被験者の数が 100 名前後と非常に多く、統計上の信頼性が高いこと、(2) 録音調査も行い、フォローアップ・インタビューを充実させたこと、(3) 中間言語の使用者を中国国内にいる日本語学習者と日本に滞在している留学生に分け、言語の習得環境も考慮に入れたこと、(4) 普遍的なフェイス理論によってストラテジーに理論的意義づけを行い、さらに従来の意味公式リストに改良を加えたこと、(5) 意味公式の数だけではなく、出現順序も考慮して分析したこと。

分析結果によれば、日本語学習者は日本人と同じく、「詫び」のストラテジーを多く使っており、中国では普通でも日本社会では不適切となる発話（先生に対する「今度私がおごります」など）はほとんど見られず、中国での日本語教育は一見するとうまくいっているようであるが、日本人と比べて「詫び」の回数が少ない、謝罪表現のレパトリーが少ない、「ちょっと」の過剰使用、言いさし文の習得不足などの課題も多数見つかった。

記述が詳細であるがゆえに、ややもすれば大局が見えづらく、理論的な展開にも不満が残るものの、これまでにない大量のデータと、興味深い「誤用」例の数々は、今後の日本語教育に大きな価値を持つものといえる。

以上、本論文は自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力と学識を有することを示している。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。